

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

成美型ESDの取組

身近な事象（人、もの、こと）に働きかけ、関わりやつながりを大切にしながら主体的に活動する子供の育成を目指して

I 成美型ESD教育の重点

本校がESD（持続可能な開発のための教育）の取組を開始して3年目に入った。東日本大震災以後、将来の日本の未来を担う子供をどう育てるのかを問われている。本校では、「自立」と「共生」を教育目標の柱に掲げ、全教育活動をESDの視点で見直し、教育課程に位置付けてESDの研究推進を図ってきた。これまでの実践に引き続き、「身近な事象に働きかけ、関わりやつながりを大切にしながら主体的に活動する子供の育成」を目指して研究に取り組んでいる。

今年度は、以下のことに重点をおいて研究を進めている。

- ① 今だからこそ学ぶ価値のある単元を構成する。
- ② 地域に積極的に足を運ぶことで子供の問題意識を促し、自分ごととして課題解決を図る学習過程を工夫する。
- ③ 防災、伝統継承、環境教育等、各学年の特徴を生かした取組を展開し、保護者や地域に発信することで、表現力の向上を図り、他者評価により子供の自信を深める。

II 成美小学校ESD年間研修計画

(○の数字は実施日)

研修内容と取組み		
月	ESD	教師力向上研修
4	○研究主題の設定 ○研究計画の立案 ⑧今年度のESD研修の共通理解	・一人一授業研究計画 ⑧成美スタンダードとチャレンジタイムの共通理解 ⑳アクティブ研修「タブレットの活用場面」
5	○ESDの考えを取り入れた年間指導計画の作成(各学年)	⑰4年1組 国語科(神田) ・若手教員研修計画(月1回) ・小教研学力調査分析 ⑳学校訪問研修
6	⑳ESD校内研修 講師 松本先生	⑬3年1組 道徳(土合) ⑯外国人指導教室 算数科(坂林) ⑳ESD提案授業 4年2組 道徳(遠藤)
7	○年間計画・ESDカレンダー見直し ⑳ESD授業作り研修① 講師 松本先生	・ノートコンクール ⑤アクティブ研修「実物投影機」 ⑫アクティブ研修「フラッシュ型教材・タブレットの活用場面」 ㉑学期末学習定着度分析
8	○年間計画の見直し(2学期) ○ESDパネル作成(11月完成) ⑳ESD授業作り研修② 講師 松本先生	⑳生徒指導研修「2学期からの指導に生かす情報モラル研修」 講師 広島教販 ㉑全国学力状況調査分析 アクションプランの見直し ⑳特別支援研修「子供の実態から語り合う会」講師 石崎先生(子どもと親の相談員)

			・夏休み研修資料展示会
9	②⑥ESD指導案検討	②⑥知障級 自立活動 (田中) ②⑨6年2組 特活 (前) ③⑩2年1組 道徳 (大野)	①アクティブ研修「問題行動の分析」 ・漢字計算チャレンジテスト
10		③1年2組 算数科 (遠) ③⑪情緒級 自立活動 (金森)	
11	⑦ESD事前研修 講師 松本先生 ②⑪ESD校内事前研修会 ③⑩ESD公開校内研修会 講師 松本先生	②2年2組 体育科 (高橋) ③⑪1年1組 算数科 (経塚) ③⑩ESD提案授業 3年2組 算数科 (川崎) 5年2組 総合 (堀田)	
12	○実践の振り返り	①少人数指導5年算数科 (加藤) ⑥5年1組 算数科 (中山)	・ノートコンクール ・学期末学習定着度分析
1	○研究のまとめ作成 ②⑧ESDシンポジウムへの参加 (6年)	②⑪6年2組 理科 (西嶋) ③⑩通級指導教室 自立活動 (川口)	・一人一授業のまとめ ⑩アクションプランの見直し ③アクティブ研修「特支教材研究」 ⑩アクティブ研修「海外視察報告」
2	②⑩研究のまとめ発表会		・若手教員研修の振り返り ・漢字計算チャレンジテスト ⑦アクティブ研修「教材活用研修」 講師 教育同人社
3	○次年度への方向付け 共通理解		・ノートコンクール ・学期末学習定着度分析

Ⅲ 研究の実際

各学年の取組から

【第1学年の実践】

★1年生「なかよしいっぱい」

4月から、具体的な活動を通して、自分と人・物・自然との関わりを大切にして活動を行ってきた。まず、学校に慣れることが大切である。そこで、学級や学年の友達、そして上級生や学校の先生方と仲良くなる活動「あくしゅだいさくせん」を行った。自分で書いた名刺を渡して自己紹介をするなど、自分から関わろうとする姿が見られ、人と関わることの喜びを感じ取ることができた。また、「がっこうたんけん」では、2年生に案内してもらい、その後、自分たちで学校探検を進め、小学校に仲間入りをしたという実感をもつことができた。



「あさがおとなかよし」では、自分のあさがおを大切に育てようという気持ちが芽生えた。「いきものとなかよし」では、バッタやダンゴムシなどの生き物に愛着をもちながら飼育活動を行った。「あきとなかよし」では、どんぐりや落ち葉を使った遊びを工夫し、自然と関わりながら、主体的に活動を行った。

【第2学年の実践】

★2年生「なかよしの輪をひろげよう」

2年生は、異学年や他校（特別支援学校）、地域の人々との関わりを通して活動を進めてきた。

「1年生となかよし」では、学校探検や1、2年合同校外学習で、1年生に思いやりの気持ちをもって接し、なかよく安全に活動しようと協力し合う姿が見られた。



「こまどり支援学校の友達となかよし」では、こまどり支援学校を訪問し、交流活動を行った。学校を案内してもらったり、なかよしタイムで相手のことを考えながら関わったりすることで、自然にコミュニケーションが生まれ、友達意識が芽生えた。また、身体的な不自由さはあるが、こまどりの友達もみんな頑張っているという姿と間近に接し、仲間意識を高めるとともに、自らも向上心をもつことができた。

「町の人となかよし」では、子供の生活の基盤である地域に視点をあて、子供達が関心をもつ身近な建物（店、図書館）や場所（公園）、さらにそこで働く人とかかわる楽しさを味わいながら地域とのかかわりを深めた。

【第3学年の実践】

★3年生「成美の大好き新発見！」

1学期には、成美地区に住んでおられるたくさんの方を見つけてみる活動を行った。自分の見つけたすてきな人にインタビューをして新聞にまとめ、友達に紹介した。また、3年生全員で「すてきな場所、すてきなお店、すてきな人」を見つけてみる校区探検を行い、実際に歩いてみることで自分たちの校区のよさをたくさん発見することができた。



そして、日頃からお世話になっている守ろう隊や読み聞かせの方を招待する集会を開いた。子供たちが考えたアイデアを生かした集会を開くことで、地域の人と関わり、地域の人に感謝の気持ちを直接表すことができ、より一層、地域への愛着を深めていくことができた。

【第4学年の実践】

★4年生「成美の環境未来プロジェクト！」

社会科と総合的な学習の関連を図り、環境問題について調査活動を中心に取り組んだ。社会科では、安全な水道水を作るための施設、汚れた水をきれいにして川に返す仕組み（リサイクル）を見学したことから、子供たちは、当たり前と思っていた身の回りのことにも多くの人々の工夫や努力があることに気付くことができた。学習発表会では、環境問題を題材にした劇で地域の人に呼びかけ、さらに地球温暖化や酸性雨などについても調べ、自分たちで地球環境を守っていききたいという意識を高めた。



このようにして調べたことから自分たちができることを実践しようと、水の使い方を見直す、電気を節約して使う、ごみを分別してリサイクルするなどに取り組んだ。また、伝えたいことを新聞やポスターにかき、発信した。

【第5学年の実践】

★5年生「僕たち私たち高岡観光応援隊！！」

総合的な学習の時間に、市観光交流課よりゲストティーチャーを招き、子供たち

を「高岡観光応援隊」に任命していただいた。町中に観光客を増やすため、高岡の魅力を紹介するビデオを作ることになった。最初は、「高岡に魅力なんてあるのだろうか?」と疑問をもっていた子供たち。何度も身近な地域のものやことを調査し関わることで、身近すぎて気付かなかった高岡の魅力を再発見し、「高岡にはすばらしいものがたくさんある」との気が生まれた。そして、地域にはそれらを支える人々があり、歴史の裏には人々の思いや支えがあることを実感していった。



【第6学年の実践】

★6年生「成美防災プロジェクト～共に手をつないで～」

本校は東日本大震災以降、総合的な学習の時間において防災教育を行っている。今年度は熊本で大地震があり、子供たちは、日頃の備えや防災に対する知識が大切だと改めて感じた。熊本地震のボランティアに行かれた方の講演を聞いたり、調べ学習をしたりして防災について学習した。夏休みには「全国少年消防クラブ交流会」に参加したり、校区の商業施設や保育園に調べ学習に行ったりするなど、体験活動を行った。そして学習発表会やESDシンポジウムにおいて、自分たちが学んだことを外部の人に発信した。



IV ESD研修会の実際

3年算教科の実践から

授業者 川崎 喬史 教諭

1 単元について

重さの測定などの活動を通して、重さについて単位と測定の意味を理解し、重さの測定ができるようにするとともに、重さについて量の感覚を身に付けられるようにすることをねらいとした。

子供たちは、重さについて、身体測定やものを持ったときなどの経験で「重い」「軽い」といった感覚は経験していた。また、計器を用いて重さを測定することは、日常生活の中で見聞きしていた。

そこで重さの概念を学習するために、次の3段階を重視した。①自作天秤を用いて重さの大小を比べる。(直接比較)②基準となる単位を決めてその数で重さを表す。(任意単位による測定)③1g、1kgなどを単位とし、はかりを用いて測定する。(普遍単位による測定)このように、天秤による比較や、はかりによる測定など、具体的な活動を多く経験させることで、基本的な量としての感覚を養うようにした。課題を解決する過程では、一人一人が自分の考えをもって話し合いができるようにし、生活経験や、既習した学習と関連付けながら進めていくことで、重さの表し方や普遍単位の必要性を理解できるようにしたい。どの子供も本気になって学習に取り組むために、体験活動を多く取り入れ、試行錯誤を繰り返す中で、分かった、できたという喜びを味わえるように、子供に寄り添いながら支援を行いたいと考えた。

2 主体的に取り組むための課題提示の工夫

子供たちの学習意欲を引き出すために、王様からのミッションをテレビに映し出し、提示した。いつもとは異なる課題提示の仕方に、子供たちの学習意欲が高まり、積極的に課題に取り組むようになった。

天秤で重さを比べる活動では、消しゴムやのり、はさみなどの日用品を使用した。また、子供たちが意欲をもって天秤を使って重さを測定できるように、豆つかみ大会の豆の重さを測定して、ランキングを決める活動を取り入れた。はかりで重さを調べる際は、筆箱やランドセル、国語辞典など、全て一人一つ所有しており、日常生活の中で使用しているものを利用した。子供たちが普段目にしたり、使用したりしているものを利用することで興味・関心

をもって重さを調べることができた。

3 算数科と理科を合わせた単元構想

算数科と理科を関連付けて行った。体重計にどのようなり方をしても体重は変わらないという重さの保存性について学習した。理科では、粘土や缶、アルミ皿の形を変えながら重さを調べ、ものの形を変えても重さは変わらないことや体積が同じでも物質によって重さが違うことに気付かせるようにした。

4 学び合いを深めていくためのペア学習、グループ学習の工夫

友達に考えを伝えることで自信をもって発言できるようにするためにペア学習を取り入れた。また、ペア学習の後に、「ペアの人の考えが素敵だと思った人はいますか。」「ペアで考えが違った人はいますか。」と、子供たちに投げかけることで、相手の考えを聞くことを大切にするとともに、発言の苦手な子供の考えを広めるための手立てとした。

グループ活動では、自分の考えを話したり、相手の意見を聞いたりし、試行錯誤を重ねながら操作活動を取り入れていった。豆つかみ大会でつかんだ豆の重さをグループで協力して直接比較を行い、1位から4位までのランキングを決めた。直接比較から任意単位による重さ比べへと移行していく学習では、つかんだ豆の重さの1位から24位までのランキングを決めようという課題を設定し、グループ活動を取り入れることで、お互いに見合いながら正確に量ることにつながった。

3年算数科とESDの実践から

金沢大学教職大学院 教職実践研究科 教授 松本 謙一先生

1 指導の内容と指導助言

(1) 個の学びが深まる学級

子供たちが思ったことを何でも言える素敵な学級だった。だから、安心して自分の考えを自信をもって話すことができる。友達の考えと自分の考えの小さな違いにも気付いて、意欲的に発言できる。本時では、学級24人の豆の重さを比べるために、任意単位のよさに気付くことがめあてだった。子供たちは、この課題に真剣に向き合っていた。積極的に発言するだけでなく、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞く学級作りがあるからこそ、課題に向かって共に学ぶ集団となる。このような集団でこそ、個の学びが深まっていく。子供たちの発言には、褒めて、認めて次の子供の発言が出るようにしていく教師の姿勢でありたい。



(2) 子供たちの考えを練り上げる教師の発問・切り返し

「豆つかみ大会」で一人一人がつかんだ豆を、1位から24位まで順位を付けるためには、直接比較では時間がかかり過ぎてできない。そこで、どうするかを考えることで、間接比較に気付かせ、任意単位のよさと意味に気付くことにつながる。

間接比較のために何を使ったらよいのか、子供たちから多様な意見が出た。「チョーク」「豆」「おはじき」「ブロック」のどれがよいのか。「簡単だから」「便利だから」と発言する子供には「何が簡単なのか」「どうして便利なのか」と問いかけたい。「ブロック」で重さ比べをすると指導案には書いてあるが、最後は、教師が決定するのではなく、子供たちで決めさせるようにしたい。

教師は、子供たちの発言を認め、励ましながら、「私も発言したいな」という気持ちにさせていくことが大切である。

また、「重さ」について考えるのか、「大きさ」について考えるのか等、今何について考えるのかを発問や切り返しにより明確にしていく必要がある。なぜ、おはじきがいいのか、なぜブロックがいいのか、重さの概念の本質を引き出す切り返しをしていきたい。

(3) 全員が主役になるためのグループ活動での配慮

重さを確かめる活動場面で大切なことは、自分の物は自分で測ることと、そのときに他の子供たちは、必ず見守っている、ということである。それは、一人一人が主役になる場面を作るということと、実験の客観性を保つという2点で重要である。グループ活動に入る前に、教師は押さえておきたい。算数科だけでなく、理科でも大事な視点である。



2 講評

前時も見したが、何でも言える学級、これが授業を支えている。教師の日頃の姿勢が授業に表れている。この授業1時間だけでなく、子供たちが、この後どう意識をもって進めていくかが大切である。今後も多様な意見が出てくるだろうが、子供たち同士で練り上げていけるように教師は支援していきたい。教師は、切り返しや声かけをしながら学習を進めていくことを忘れてはいけない。

4年道徳の実践から

授業者 遠藤 舞偉 教諭

1 主題名 感謝する心 2-(4) 尊敬感謝

資料名「しょうぼうだんのおじさん」(東京書籍「どうとく4 ゆたかな心で 富山県版」)

2 主題について

本校の子供は、毎日の登下校では「守ろう隊」の人たちに見守られながら登校したり、ボランティアの人たちによる絵本の読み聞かせをしてもらったりなど、様々な場面で地域の人にお世話になっている。社会科「火事からくらしを守る」では、消防士の仕事が自分たちの生活を守ってくれていること、成美地域にも消防団があり地域の人たちが自分たちの町を火事や災害から守ってくれていることを学んだ。また、昨年度の総合的な学習の時間「成美のたからもの大発見」では、学校の花壇のお世話をしている地域の人や獅子舞を守り伝えている人に目を向け、話を聞く機会をもった。しかし、自分の生活と結び付けて感謝の気持ちを感じている子供は、まだ少ない。そこで、資料の主人公の心に寄り添って話し合い、今まで関わってきた地域の人たちが陰で生活を支えていることに気づき、尊敬と感謝の心を育てたい。

本資料は、主人公けんいちとなかよしのパン屋のおじさんが、町の消防団員だった話である。いつもやさしいおじさんが、消防団員だったことを知り、父から消防団員の仕事のことを聞いたけんいちはおじさんのことを見直す。そしてある夜、町の広場で真剣に訓練に取り組む様子を見かけて心を打たれる。けんいちのおじさんへの思いの変容を考え、話し合うことによって、ねらいに迫りたい。

3 主人公の心の変容に気付く「心の円」の提示

今まで道徳の時間には、自分の心の葛藤を目で見えるように表現する「心の円」を使ってきた。自分の心をピンクか水色の大きさで表し、どんな気持ちなのかを視覚的に見えるようにすることで、互いの気持ちの根拠を話し合い、多様な考えを知ることができた。

本時の資料には、主人公のけんいちがパン屋のおじさんに出会う場面が3回出てくる。それぞれの場面でのけんいちの気持ちを「心の円」で表し板書に位置付けることで、視覚的に主人公の心の変化を捉えさせ、変化した理由を話し合うことで、友達の考えを聞き合う雰囲気をつくりたい。

消防団の訓練をしている様子を初めて見て、主人公が「むねがじいんとしてきました」の場面は、自分たちの生活や地域を支えるために真剣に努力をしている消防団の様子に感動し、感謝の気持ちをもつ場面である。「心の円」では表しきれない気持ちがあることを話し合わせ、主人公の気持ちに共感することで、自分たちの地域を支えてくれる人たちにも感謝の気持ちをもつことができると考えた。

4 地域へ目を向けるきっかけになる動画の活用

子供は、社会科の学習で消防署の訓練の様子を見学をしたり、消防団について学習したりしているが、消防団の訓練は夜や早朝に行われるため、実際には見たことがない。そこで、教師が撮影してきた成美分団の訓練の様子を動画で見せる。そこには、子供の顔なじみの近所のおじさんもいるはずである。火事や事故、災害など、いつ起こるか分からない有事のために、真剣に訓練し、いざというときに備えてくれている消防団の様子に、素直に感動したり憧れの気持ちを抱いたりすることだろう。それは資料の主人公の気持ちに重なるはずである。自分たちの地域にも資料のパン屋のおじさんと同じような人がいることを実感することで、地域に目を向けるきっかけにしたいと考えた。

4年道徳とESDの実践から

金沢大学教職大学院 教職実践研究科 教授 松本 謙一先生

1 「MK法」の実際

道徳の授業記録を基に、子供の発言を細かく追いながら子供の捉え方や教師の支援の在り方について具体的に助言をいただいた。

本時の授業で「成果」と捉えたことは赤、「課題」と捉えたことは青の付箋で示した。松本教授の司会のもと、時系列順に各々の考えを聴き合った。ESDの視点「コミュニケーション力」「つながりを尊重する態度」は、この授業を通していつの間にか育まれているとよいと、松本教授から助言をいただいた。

2 協議内容と指導助言

(1) 資料提示の工夫について

導入で、資料の価値について方向付けをしてもよかったのではないか。例えば、「今日の話は、自分の仕事をやりながら、儲けとは関係なく働いている人の話だよ」と方向付ける。また、教材文を読むときの視点を始めに与える。「主人公が、どんなことを考えながらいるのだろうか、後から聞くからね。けんちゃんになったつもりで読もう」など、主人公に自分を重ねて考えられるようにする。



(2) 自己の生き方を見つめ、仲間と磨き合う契機となる場づくり

① 自己評価「心の円」の使い方について

本時は、「心の円」の価値について協議した。

自己評価「心の円」は、子供の主観なので、むしろ心情の変化を色で捉えることに意味がある。1回目と2回目の色が同じでも意味が違うことを語らせる。また、自己評価をすると、自分のものさしで友達を見て、自分と違うのはどうしてだろうと友達のことを聞きたくなる状況をつくる。全員カードをもっていれば、一人一人の気づきの深まりや道徳的価値の深まりがある。自分のものさしで相手を見るから相手のことが知りたくなる。全部同じ価値観にする必要はない。友達の価値観に触れて、それがすてきに思えたら、「やっぱりもう少し〇〇しよう」とものさしの軸を変えるきっかけになる。

また、「心の円」を2回使うことで、点として答えるのではなく、どう変わったか語ろうとする子供が生まれる。「ただ、消防団をしているだけでなく練習してまで続けている」と、道徳的価値に気付いていく子供になる。それを友達同士で語る可能性がある。



② 子供の発言の背景にある道徳的価値を捉えるための教師の問い返し

中心的な発問を契機に、さらにねらいに迫るために「どうしてすごと思ったの」と問い返し、考えの深層を自覚させたり「どちらも同じなの」など、他の子供に広めたりすることも必要である。自分のくらしとつないで考えている子供の発言から、後半の生活を見つめさせる場につなぐ柔軟な対応も考えられる。

③ 授業後も子供の道徳性の変容を見届けようとする教師の関わり方

「成美のために活動している人はどんな人がいますか」の発問で子供たちの目が変わった。「こんなことまで見付けていたみんななのね」という教師のアイ・メッセージが伝わるすてきな授業であった。くらしに学びがつながって、くらしの見方が高まっていくきっかけになった。今後、朝の会などで「見守り隊の人に『ありがとう』って言ったよ」と話題にしていくことで、心豊かな子供が育っていく。

5年総合的な学習の時間の実践から

授業者 堀田 陽 教諭

1 単元名 僕たち私たち高岡観光応援隊!!町中のかくれた魅力を伝えよう!!

2 単元について

本学級の子供たちは、これまで地域のことについて社会科や総合的な学習の時間を通して、地域(校区)の人や事象(もの、こと)に積極的に関わってきた。直接人やものに触れ、関わる楽しさや地域のよさも感じている。子供たちは5年生になり、これまでの身近な地域から高岡市へと視野を広げて学習し、高岡市のよさについて漠然と



であるが捉え始めている。また、ものづくり・デザイン科でも高岡市に残る伝統工芸について学んでいる。北陸新幹線の開業もあり、子供たちは高岡市にたくさんの観光客が来ている

と考えていた。しかし、実際のところは、瑞龍寺周辺の観光客数は増加しているものの、高岡駅北(町中)では観光客は伸び悩んでおり、その事実について知っている子供は少なかった。

高岡市は今年、「観光振興プラン」を作成し、町中の振興策について検討を進めている。また、その中で「高岡市民のおもてなし意識」の向上についても述べられている。そこで、本単元では、子供が自分の目線で高岡市のかくれた魅力を発見し、広める活動を通して、高岡市のよさを再認識し、地域に対し、親しみや愛着を感じてほしいと考えた。

導入では、市観光交流課よりゲストティーチャーを招き、「高岡観光応援隊員」に任命してもらい「高岡の町中のかくれた魅力を発信する」という課題を提示してもらった。これにより、使命感をもち、自分のこととして学習に取り組もうとする意識をもてるようにした。そこから、子供たちは、現地に出向き、身近な人・事象に繰り返し関わりながら「かくれた魅力」について調べ考えていった。新たな発見や、新たな価値を見い出したりしながら考えを深めていく姿が見られた。それにより、地域の人やもの・ことへの親しみや愛着も深まっていった。また、見つけた魅力を伝える方法を明確に示すことで、見通しをもち主体的に調べたいものに関わっていった。

その後、見つけた魅力についてビデオを制作した。ビデオの前段階として、フリップを使い、高岡の町中のかくれた魅力をどのように伝えるか話し合う場を設けた。子供たちは、情報の取捨選択や分かりやすく伝える技術を考えることで、何度も対象と関わって活動を続けた。また、できあがったビデオを他者に見て確認してもらいたいという気持ちから、必要感をもち、子供同士でビデオを見合う場が生まれた。今後は、ゲストティーチャーからアドバイスをもらうことで、よりよく魅力を伝える方法について考える場としたい。

ESD 公開講座協議会記録

平成28年11月30日

5年総合的な学習の時間とESDの実践から

金沢大学教職大学院 教職実践研究科 教授 松本 謙一先生

1 指導の内容と指導助言

(1) 子供の教材を共感的に見るための提示の仕方

「ぼくたちの知っている高岡の魅力を見付けたい」「ビデオを作っているいろいろな人に見てもらいたい」という子供たちの思いから学習が展開されていった。本時は、初めにできあがった Y さんのビデオの視聴から始まった。「自分のビデオがみんなに伝わるだろうか。みんなに見てほしい」という Y くんの気持ちと、「見たい、見たい」というみんなの気持ちを、教師は十分に高めて、大事に教材を提示したい。紹介



するときは「伝えたい Y さんの思いを、みんなで分かってあげよう」と教師は語りかけた。子供が作ったビデオは単なる映像の教材ではない。Y さんは何を魅力に感じ、何を見せたいのか、Y さんの内面に入り、考えに寄り添う気持ちで話し合うことが大切である。みんなが認め合い温かい見方をしてくれる学級、仲間であるよう教師は意識し続けたい。

(2) 話し合いを通して個々の活動へ立ち返る学習課題

Y さんのビデオを取り上げた話し合いは、「本当に伝えたいことを伝えるための工夫を自分もしているかな」という一人一人の振り返りにつながっていく大事な場面である。子供たちに、「もっと伝わるようにするにはどうすればよいだらう」と投げかけたらどうだろう。自分の思いを表現するには、どんな表現の工夫をしたらよいか、本当に自分の思いを伝えられているのか。話し合いを通して、一人一人が自分の活動に立ち返ることができるのである。



2 講評

伝えたい Y さんの思いをみんなで分かってあげようという温かい気持ちで話し合えるように意識したい。「Y さんはこういうことを伝えたかったんだね」「Y さんはこうだけど、ぼくは〇〇だと思うよ」「なるほど、そんな考えもあるね」と話し合いが、子供たちから湧き上がってくるような雰囲気づくりをしたい。

誰もが Y さんのように自分の力だけで表現できる子供ばかりではない。現地へ何度も出かけることもできない。自分で考えて自分で活動していけるようにするにはいけない。そのためにも話し合いの場は大切にしたい。

この授業を一番支えていることは、「自分たちの地域だ」ということ、「友達や先生と一緒に活動している」ということである。先生と一緒に活動するのは安全のためであり、子供たちの活動を陰で支えている。教師はその上で、「あなたはどうしたいの？ どう表現したいの？」と問いかけて、自己決定させている。そして「できたね」とねぎらいの言葉をかけている。このようなプロセスの中で、子供たちの心の中に「高岡」が根付いている。地域の人に守られ、自分たちはこの町が好きだと実感することができるのである。

先生と教室の友達が自分を支えてくれている、そんな気持ちになれる学級でありたい。



まとめ

【成果と課題】

- 単元との出会いの場や単元名を工夫することで、子供がこれからの学習に見通しをもち、単元名に立ち返りながら一人一人が課題をもって問題解決に向けて追究することができた。
- 互いに教え合い学び合う活動や地域の人との交流など、他者と共同して課題を解決しようとする学習活動を取り入れた。そのことで、子供たちは、課題解決に向けて活動の広まりや深まり、学びの連続性を生み、主体的に活動に取り組むことができた。
- ESD カレンダーを活用し、全教育活動から ESD の視点を捉え、「持続可能な社会づくり」に向けて授業づくりに取り組んできた。来年度は、さらに子供がどのように学びを獲得し、どのような資質や能力、態度を身に付けていくかということをも明らかにして年間の活動を考える必要がある。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他（

）